

やまぐち自然派宣言

共生の思想を深める④ 庫本 正

会長あいさつ 白井啓二

表彰受賞者活動紹介

山口県きらめき財団理事長表彰

古市節分草保存会

開村 修三

山口県環境保全活動功労者

原田 量介

山口県環境学習功労者

大田 和彦



共生



会員だより

自然を後世に伝える

カンザクラ（向島）のDNA

やまぐち自然共生ネットワークに参加して

ヨシの利用と活用

久保田啓子

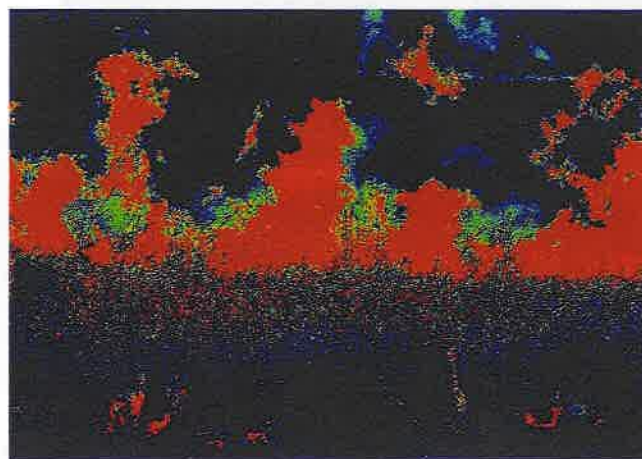
中村 裕三

森田 元志

藪 博昭

総会及びリレーミーティングin長門

会長表彰



やまぐち自然共生ネットワーク

平成 29 年 1 月 31 日

共生の思想を深める④

「共生」という言葉を考える

庫本 正

「共生」という言葉は様々な分野で使われてきた。学術用語としての「共生 symbiosis」は生物の種間関係に関する学術用語である。

仏教用語でも「共生（ともいき）」があり、これは「願共諸衆生往生安樂国」からの「共生」で仏や人と共存するというものらしい。

環境用語としての「共生」は、古来日本人が目標にした自然と一体化する生活を通して体験したもので、仏教用語の共生に近い。

近年、生命科学研究の進歩で、生命における「共生」は細胞共生、二次細胞共生などで生物進化に大きく関わっていることが分かってきた。生命の進化が起ると生物の多様性が拡大、地球環境も変化してゆく。

人類が出現すると、優れた脳の力で科学技術が開発され、便利な暮らしを入手したが、地球温暖化、オゾン層の

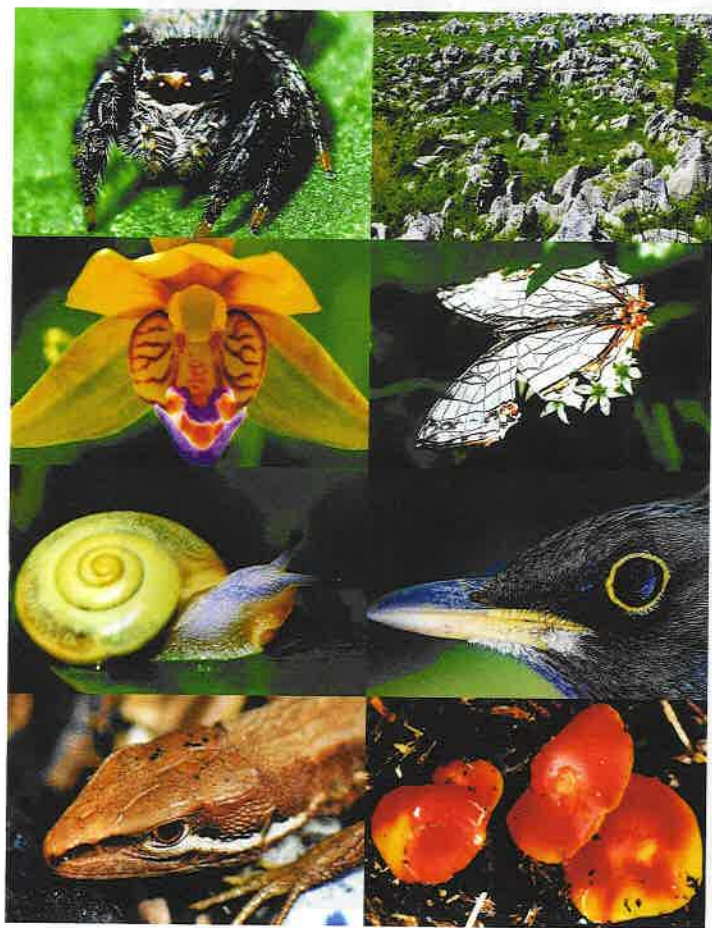
破壊、生物の絶滅などの環境破壊も起こった。ここで「人と自然の共生」が求められた。

この共生はどんなものか、岩槻先生らは深く探求を続けている。

『人と自然が共生するとはどういう状態か。これは人が自然を利用するという関係ではなくて、ヒトも生物の一種として自然の構成要素となることを意味する。』
（略）

自然を構成する一要素であるヒトが、たとえ科学技術を飛躍的に発展させたとしても、それが自然のなかで、自然に反抗するかたちにならないように運用をすることである。人が自然と共生するかたちが整えられてはじめて、地球の持続性は成り立ち得るものである。』

岩槻邦男／仁王以智夫著『共生する生き物たち』（ミネルヴァ書房）より



～ヒトも自然の構成要素～

会長あいさつ

白井 啓二

(錦川流域ネット交流会)

全国河川交流会に参加して

みなさん、新年あけましておめでとうございます。昨年の十一月十二日から二日間におたり福島県福島市で河川交流会が行われました。平成十二年に山口県でさらに博が開催されましたが、時を同じくして福島県では、うつくしま博が開催されました。戊辰戦争から紆余曲折あったようですが、これを機に交流を持つというところで、河川交流会が行われました。最初に山口県が福島県に行き、交流会を行い、続いて福島県から山口県に来られ交流会が発足しました。次の年、戊辰戦争に関わりのある新潟県も参加し、三県交流会となりました。次の年は、愛知県・三重県・岐阜県も加わり、六県交流会となりました。さらに高知県・鹿児島県・福岡県が加わり、九県交流会、更には島根県・宮城県・岩手県・東京都も加わり、昨年からは全国河川交流会となりました。昨年で第十六回を数えました。開催地は、福島県が五回、山口県が四回、新潟県が三回、三重・岐阜・愛知県合同が三回、福岡県が一回です。私は過去十二回参加して

います。参加して思うことは、全国の川に行つて視察し、学び、交流を持ちますが、川には河川文化があるということです。その河川にしかない文化があるのです。今から十年前、全国市町村の平成の大合併が行われましたが、ある大学教授が、同じ河川の流域で合併しないと、河川文化が違うので考え方も異なりうまいかなと言われたのを思い出しました。まったくその通りだと思います。全国の河川を見てそう思います。また、川で遊ぶ子供たちを、私たちは川ガキと呼んでいます。今では絶滅危惧種となっていますが、私たちの子供のころは、子供たちだけで川に行き遊んでいました。夏は川に入り浸りでした。高学年が低学年の面倒を見ていました。ここは危ない、ここは安全、こう泳いだらいい、こうしたら魚が捕まえられる、すべて高学年から教わったものです。いつの時代からか、子供だけでは川に入れないようになりました。「川は危険です」「川に入つてはいけません」こんな看板が目につくようになりました。カヌーイストの野田知佑さんは四国徳島県吉野川で「川の学校」を主宰しています。子供たちだけの二泊三日程度のキャンプを川で行います。インストラクターはいますが、すべて子供たちにやらせます。火のおこし方、飯盒の炊き方、魚の取り方など、教えるのではな

く、見て覚えさせ、そして自分のことは自分でやる、中には食事もできない子供もいるそうです。四日間で子供たちは立派に成長して川ガキになるそうです。毎年開催して今年で二十年を超えるそうですが、同窓会も頻繁に行われているようです。錦川でもそんな「川の学校」をやってみたいと思います。今年十一月には全国河川交流会が山口県錦川で開催されます。ぜひ、皆様も参加してみてください。全国の河川で活躍している人のすばらしい話が聞けると思っています。



表彰受賞者活動紹介

山口きらめき財団理事長表彰

古市節分草保存会

会長 林 節司

このたびは、県民活動きらめき賞を頂き、会員一同大変光栄に思っています。我々の活動も今年で八年目になりますが、本受賞により、ようやく地道な活動が地についたような気がします。



さて、先日の十二月十七日に特別公開前の保全活動と総会を開催し、今年の公開日を二月十七日(金)・十八日(土)・十九日(日)の三日間実施することに決定しました。例年通り錦川清流線利用者に限定して公開することになりました。

ところで、今までの活動の中で、セツブソウを取り巻く様々な謎が出てきました。まず、ある特定の植物が絶滅危惧されるような状況になったのはなぜか。それは大きく分けると自生地周辺の環境の変化と植物本来の特性にあると思われます。特にセツブソウは、高さが十センチ程度の背の低い植物で、他の植物との生存競争に負けてしまうため、最も寒い時期に花を咲かせ、他の植物が大きく成長する頃には枯れてしまう典型的なスプリングエフェメラルです。しかしながら、自生地に人間が草刈りなど手を入れないと、大型の草木がはびこり生存競争に負け、やがては絶滅してしまう結果になるかもしれません。幸いにも当自生地では、コンニャクの栽培、柴刈り、栗拾いや近くの墓地の整備などで毎年草刈をしていたため生き残っていたのではないかと思います。次にセツブソウの特性ですが、一般の植物は生き残りをかけて、風、虫、鳥、動物に付着するなど様々な方法で種

子散布を行います。セツブソウの種がどのようにして運ばれるのか、未だに分かっていません。さらに、花が咲くまで四〜五年要することや球茎の寿命が何年なのか等々、謎の部分が多く、今後の調査研究が待たれるところです。

このように謎の多い植物ですが、これからは活発な保存活動を通して、一つ一つ分からない部分を解明し、健気で可憐なセツブソウの自生地拡大に向けて邁進したいと、会員一同奮い立っています。



山口きらめき財団理事長表彰

開村 修三

(山口ささゆりの会)

海・山・川に魅せられて

海にすっかり関わり始めたのは、山にもそう、笠戸島に居を構えたときからで、五十年も前のことである。家内が富山県出身ということ、夏、夏の立山に登ったとき、雪がたくさんあるのに驚かされた。後に高校の登山部の顧問となり、冬山でのテント、槍ヶ岳では雪でご飯をつくるのになかなかできず、また、蝶ヶ岳ではコマクサの群生がそれまでのきつさを吹っ飛ばしてくれた。登山始めの頃の楽しい思い出。

その後、ネパール三回目にして、ナムチェバザールを超えて、サガルマータ（エベレスト）を目前にし、帰途三千五百メートルのロッジで三浦雄一郎氏とあれこれ話をした。気圧に順応し行動せねばならなかった。

カトマンズでは、大統領とも一時間ばかり話ができた、貴重な機会を得た。

一方、海の方は早くからぞっこん熱中し、北海道から沖縄の島々まで、ロイヤルブルーの海を潜水した。

与論、加計呂磨、子宝島の海。県内では、

角島、見島、青海島これ以外の海もすばらしい。

潜水の始めは四国の宇和海で、徳山港から船で出港した。まさに竜宮城かと思わしめる体験であった。海面から下に四十メートル位では浮力がどんどん下向きになり、浮上するにはゆっくりと足ひれをこいで泡が上昇する速度を超えないように気をつけていかねばならない。

数学で飯を喰わしてもらっている自分にとって、ベクトル、異次元といったことが身にしみて分かることであつた。潜水には、耳抜き、マスククリアー等をマスターせねばならない。水中マスク、水中ライト、エアコンプレッサーにしても当時は日本製のものはなく、イタリア製やドイツ製で、文明の品々もどんどん進化し続けることを痛感する。川については数々の溪谷、木々の枝を通して差し込む川面に映るせせらぎ、小さな波の音に疲れた心身が癒される。

山や川で交流を行う障害者の全国交流大会を引き受けた。山口県、山口市、周南市には、格別のご支援をいただき、なんとか感動の涙で閉会式がもてた。

今は周南市の万葉の森で、エベレスト登山時に声をかけた仲間（六人程）が中心となつて、月一回の登山（軽い）を実施し、県内各

地より障害者の方、ボランティアの方等が参集している。

新年度より福祉協議会の方も協力してくださる。また、今年度はテントでの食事づくりの仕上げとして、食育というか料理に取り組みたい。行動開始である。

先に気圧のことを述べたけれど、音は水中で一秒間に千五百メートル走るし、海洋（水）への関わりの重要さは、医学や音響（楽）の分野においても増大すると思われ、心躍る。それにしても、魅力、限らない対象である。



山口県環境保全活動功労者

原田 量介
(宇部市)

この度、山口県自然環境保全活動功労者として知事表彰をいただき、大変恐縮しています。私の受賞は鳥類の観察や調査を基に長年保護活動を実施し、講演や自然観察会の開催により自然保護や愛鳥思想の普及に貢献とすることでしたが、今日まで多くの方々に、ご指導と、ご協力を戴いた御陰だと感謝しています。



バードウォッチングは、野鳥に関心を持つことから始まりますが、目的は野鳥を通して自然に親しみ、自然を知り、そして自然を守っていくことにあります。野鳥を環境の指標として観ることで、地域の環境を知ることができ

ます。たとえば、宇部市の小野湖(厚東川ダム)には、越

冬のため多数のオシドリが飛来します。毎年十月から三月まで、小野湖全域でオシドリのカウント調査をはじめて二十年が過ぎました。平成十八年には越冬数二千二百五十二羽を記録し、日本一のオシドリ越冬地となりました。データを蓄積し経年変化をみてみると、オシドリの飛来数と餌となるドングリの量、貯水量、周辺環境との関わりが分かってきました。たくさんいるオシドリを保護する必要があるの？と思われるかも知れませんが、オシドリは小野湖の環境を守るための指標でもあります。周辺の山には豊かな照葉樹林が広がり、たくさんさんのドングリになります。木が伐採されてしまえば、餌が少なくなりオシドリの数も減ります。また、小野湖は西日本では有名なバス釣りポイントです。シーズンには大きな大会も行われ、多数の釣り人が集まります。多くのバスボートが湖に入ると、オシドリは小野湖には居られなくなります。さらに、この水は宇部市と山陽小野田市の飲料水にも用いられているため、バス釣りに利用される疑似餌(ワーム)や釣り糸が大量に湖底に溜まると、水質の悪化、テグスによる野鳥への被害なども起こります。また、湖畔には「アクトビレッジおの」があります。環境学習施設の傍で外来種の魚をターゲットとしたスポーツフィッシングが行われていることに

疑問を感じます。厚東川ダム湖利用者協議会においては、せめてオシドリの飛来時期(十月～三月)のバス釣りは自粛することを取り決めていますが、県外からの釣り人も多く十分な保護対策にはなっていないません。増えるブラックバスをどうするかを考えると、大がかりな駆除か、リリース禁止条例を早急に施行する必要があると思います。小野湖と同じような問題をもつダム湖は、県内にはいくつもあります。

私は、山口県立きらら浜自然観察公園に勤めていること、野鳥の会山口県支部の支部長・保護部長を受けている立場上、環境調査における鳥類保全対策などの相談を受けることが多くあります。現在、山口県においては山陰自動車道の建設やそれに伴うアクセス道路建設、ダム建設などの大型公共事業などの工事が行われています。自然保護と道路建設などは相反するものですが、できる限り多様な生物の生息環境が保全でき、少しでも人と共生できることを考えなければと思っています。

Think globally act locally「地球規模で考え、地域で行動せよ」という言葉があります。これからも微力ながら地域の環境保全のために関わっていききたいと思っています。

山口県環境学習功労者

大田 和彦

(山口県自然観察指導員協議会)

私の所属する団体は、今年度創立三十周年を迎える。創立当時から寂地山のカタクリ保全活動と八代のナベヅルのねぐら整備を行ってきた。カタクリについては、毎年四月二十九日にカタクリ観察会を行っていたが、数年前から四月中旬と十月下旬に寂地山頂上付近の登山道整備も行っている。そのためか、カタクリの群落も広がり、満開の春の妖精が以前よりも見られるようになり、登山客も満足しているようである。これからの保全活動を続けていき、頂上付近だけでなく、縦走路や頂上から下のあたりもカタクリでいっぱいにしたい。



次に、下関支部中心に行っている活動に蓋井島ヒゼンマユミ保全活動がある。毎年春と

秋にそれぞれ二〜三回竹の伐採を行ってきた。船便の関係で一日二〜三時間しか作業できなかったが、この活動は始めて八年になり、竹の伐採は一通り終了した。これからは、ヒゼンマユミの若木調査・分布調査や登山道整備なども行う予定である。

次に、岩国市の林 節司さんが中心となっていて活動にセツブンソウの保全活動がある。平成二十一年に岩国市錦町でセツブンソウ自生地が発見され、平成二十二年には「古市節分草保存会」が設立された。毎年草刈りなどの作業を行ったり、二月の公開日には見学者への案内や説明を行ったりしている。



次に、下松市の切戸川で水生生物の観察会を十四年前から行っている。参加者は小学生主体で、親子での参加となっている。この観察会は下松市では非常に人気のある行事で、申込当日には定員いっぱいとなるほどである。指標生物となる水生生物による調査では、

大体Ⅰの「きれいな水」となっている。しかし、Ⅱの「少しきかない水」の指標生物が見られるようになってきているので少し気になる場所がある。これからもこの観察会を継続し、きれいな川を維持していきたいものである。



次に、環境省と日本自然保護協会主催でモニタリングサイト1000里地調査を行っている。これは、里地里山の自然環境の変化を見つめ守り引き継いでいくために、今後百年にわたって市民の手で調査をし、保全の手だてにすることを目指している。調査内容のうち、植物相とアカガエルについて周南市中須北地区で二年前から行っている。まずは、五年間調査する予定である。

次に、環境省と日本自然保護協会主催でモニタリングサイト1000里地調査を行っている。これは、里地里山の自然環境の変化を見つめ守り引き継いでいくために、今後百年にわたって市民の手で調査をし、保全の手だてにすることを目指している。調査内容のうち、植物相とアカガエルについて周南市中須北地区で二年前から行っている。まずは、五年間調査する予定である。これ以外に六つの支部ごとに様々な活動をしている。

会員だより

自然を後世に伝える

あなたとNAGATOを結び隊

久保田 啓子

今年度より、「やまぐち自然共生ネットワーク」の副会長という大役を仰せつかりました長門市の久保田啓子です。何もわからない私でいいのだろうかと思いつつ、わからないからこそ、皆さんからいろいろなことを学ばせていただく機会を与えられたと思い、頑張っていきたいと思っています。また、私の所属する「あなたとNAGATOを結び隊」も団体に加入いたしました。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

また、六月に二十八年度の総会及びリレーミーティングを、長門市で開催させていただきました。



今まで一度も開催がなかったこともあり、ぜひ、長門を皆さんに観て知っていただきたいとの思いで、お引き受けしました。そして、おもてなしの心で準備をしたつもりでしたが、昼食場所が近くになかったり、会場がナビでは出てこなくて迷われたりと、遠くからご参加いただいたみなさまにご迷惑をおかけしてしまい、反省することも多々あったリレーミーティングでした。



でも、講演会の講師さんと会員さんの懐かしい再会があったり、新しい繋がりの場として、少しはお役に立てたのだと思います。ご参加いただいたみなさま、また今回おいでいただけなかったみなさま、長門には他にも

素晴らしい自然、食、温泉がたくさんあります。ご案内させていただきますので、お越しくださいませ。



さて、今私が思っていることなのですが、この会の目的にもあります「山口県の自然環境をさらに豊かにして後世に引き継ぐ」ということは、とても大事なことであり、私たちがしなければいけないことです。「後世」、それは私たちの子や孫の世代、それ以降の世代ですが、今私たちにできることは、今の子どもたちに、自然とのふれあいの場を提供し、一緒に守っていくことの大切さを体験してもらうことではないかと思っています。

実際に、自然満載の長門市でも、子どもの外あそびがあまり見られませんが、市の子どもの会の事務局をやっていたのですが、活動報告の中に自然とのふれあい行事を行うところは僅かでした。その原因の多くは、スポ少と習い事。そして普段の遊びでも、集まったとしてもゲームです。また、買い物は家族で市外へ行くことが多く、遊びもそうです。私は仕事柄、小中学生、高校生、そしてその保護者と関わる人が多いのですが、ワークシOPPや普段の会話の中で、自分の住むまちを知らない、近くにこんな自然があり歴史があることに気付いていないということが、わかってきました。



特に、進学や就職でこれから多くの高校生が長門を出ていきますが、「長門ってどんなところ？」と聞かれた時に、自信を持って伝えられるようになってほしいし、「やつぱりすむのなら長門が良い」と、帰ってきてくれるようにしなければ、この魅力ある自然も守る人が居なくなってしまうと思っています。



現在、毎日多くの人が訪れ、土日にはいつも渋滞するほど有名になった油谷津黄の『元乃隅稲成神社』も、「行ったことが無い。行きたいけど足がない。」と言います。残念なことです。もうこれは、大人が市内のいろいろなところに連れて行って、魅せて、自然の

大切さを伝えるしかないと思い、いろいろなところで「やろうよ！」と声掛けをしてきました。機会があれば、自分一人でもやっていきます。地域で大人と子どもが一緒になって取り組めるところは良いのですが、それが難しいところは、イベントとして一回やったら終わりではなく、小さなことから始めて地道に広げていこうと呼びかけ、や々と動き始めたところです。ただ、それが大人の想いの押し付けにならないように、「しっかり子どもたちの意見も聞きながら」を基本に!!

でも、まだまだ未熟者の私です。みなさまに助けてくださいとお願いすることもあるかと思っています。その時はどうぞよろしくお願いします。



カンザクラ（向島）のDNA

山口県樹木医会

中村 裕三

もうすぐ春ですね。あと一カ月もすれば梅は咲いたがサクラはまだかいなの声が聞こえてきます。開花時期はソメイヨシノより先に咲くサクラを早咲き、ソメイヨシノより遅れて咲くサクラを後咲きと分類します。日本のサクラは、ヤマザクラ、エドヒガン、オオシマザクラ、オオ

ヤマザクラ、カスミザクラ、メザクラ、カンヒザクラ、チョウジザクラ、タカネザクラ、ミヤマザクラから自然交雑種、栽培品種が生まれました。その種類は四百種以上と言われている



サクラの品種鑑定は、良く似た品種が多く困難でした。花、葉、開花時期、樹形、樹皮等から判断します。各地の名木で樹種論争が

展開されていましたが、研究の成果で名人に頼らなくてもDNAの解析によりに品種が分かるようになりました。「科捜研の女」で榊マリコは、毛髪、唾液、体液、血液からDNA鑑定し事件を解決します。サクラでは、花や葉だけでなくどの部位からでもDNA検査ができます。

山口県天然記念物「向島のカンザクラ」はカンザクラと他のサクラの交雑種であると新聞に書かれていました。これまでも樹形から見てオオカンザクラではないか、複数の種が混雑したサクラではないかと指摘を受けてきました。いつか、DNA検査ではつきりさせたいと思っていました。千葉大学大学院園芸研究科の中村郁郎教授の講義を受講させていただいたご縁で向島のカンザクラのDNA検査をお願いしました。

葉片百ミリグラムにより改変CTAB法を用いて全DNAを検出。結果はヤマザクラが母親、カンヒザクラが父親とするカンザクラであると判明しました。ただし、母親のヤマザクラの塩基配列が既知のカンザクラとは二ヶ所異なっている。データベースにあるヤマザクラで一致するのは静岡県周知郡の八幡神社のヤマザクラだけでした。ただし、この固体を母親と特定するものではない。先生のメールには「向島のカンザクラがどこから来た

か分かって面白いですね。いずれにしてもDNAレベルではユニークなサクラと認定できます」と結んでありました。唯一無比のカンザクラはDNAにより立証されました。

在原業平は「世の中にたえてサクラのなかりせば春の心はのどけからまし」と詠みました。直訳すると、この世の中にサクラと言うものがなかったなら春をのどかな気持ちで過ごせるだろう。平安時代に限らず、安土桃山時代では豊臣秀吉の醍醐の花見、江戸時代では八代將軍徳川吉宗の飛鳥山、隅田川での花見等、どの時代でもサクラは多くの人の心をとらえてきました。現代も同じで、サクラの

シーズンになると名所は多くの人でにぎわい、TV、新聞もこぞって取り上げます。日本人のサクラ好きDNAは不滅です。



やまぐち自然共生ネットワークに参加して

錦川オオサンショウウオの会

森田 元志

はじめまして。昨年やまぐち自然共生ネットワーク会長白井啓二先生に誘われ、会員、役員の一員として活動させていただくこととなりました。ご指導よろしくお願いします。

経緯は、白井会長が、錦川水系宇佐川流域に生息する国の特別天然記念物オオサンショウウオの保護及び地域創成を目的とした「錦川オオサンショウウオの会」の会長代行で、私が事務局長であることから誘っていただきました。

私は、山口県北東部の島根・広島県境の地、錦町の自然豊かな所で育ち、地元の農業高校で学びました。小さい頃から霊峰寂地山、羅漢山の裾野を駆け巡り、四季折々の素晴らしい景色に感動し、清流宇佐川で鮎、ヤマメ釣りを楽しみ、自然の恵みを全身に受け育ちました。三つ子の魂百までと申しますか、就職のため故郷を離れ県内の市町村を転々としたが、行く先々で時間を見つけ趣味の野山散策、溪流釣りを満喫していました。現在は、エビネラン、白糸草、大文字草等、錦町に生

息する山野草を中心に三十数種類を育て、夏には宇佐川での釣りを楽しみ、オオサンショウウオ保護・調査活動のお手伝いをさせていただき老後を楽しんで過ごしています。

私は、四十年間公務員として多様な人々(博士、大臣から犯罪者まで)と接してきました。そこで見たのは“人は色々”でした。人は「育った環境で性格が形成され、職業によって生き方が形成される」とのことでした。大企業の社員は企業戦士として、零細企業の社員、職人は生活戦士として、学者は知識、職人は感性で、公務員の多くは保身を信条として生きながらえている光景でした。

私は定年まで少しの正義感と生活の糧を得る目的のため生きてきました。定年を迎えるに当たり、四十一年の長きに渡り公務員として安穩に生活させていただいた恩返しとして何ができるかを考えていた時、山口大学名誉教授理学博士山岡郁雄氏と再会したことで、白井会長との出会いがありました。この出会いが「錦川オオサンショウウオの会(平成二十三年六月十八日設立)」の結成に繋がり、地域住民の目的である“地域創成”の輪の中に入り、ボランティア活動の一步を踏み出しました。活動を開始して一番の喜びは“素晴らしい人たちとの出会い”でした。これまでの“人は色々”とは異なり、目的を同じくする

人は話せば分かる、共に行動を起こす、一体感ができるという素晴らしい出会いでした。任意団体である「錦川オオサンショウウオの会」の活動が継続しているのは、白井会長代行を中心に二十数名の役員が地域の自然を誇りに“自然と共生し地域創成を”という目的の下に結束しているからです。また、地域住民、調査・研究を行う山岡博士や高川学園教諭の村田満氏、高川学園の生徒、関係者の皆様の“過疎地創成”に対する理解と協力も欠かせません。

昨年は、新入会員、役員として第十三回リレーミーティングに参加させていただきました。NPO法人母なる海を守る会会長島壽一明氏の講演「ビーチ・クリーン大作戦」を聞き、感動と元気をもらいました。やまぐち自然共生ネットワーク会員の皆様の活動指針、応援メッセージとなったと思います。

今年の第十四回リレーミーティングでは、事務局長として白井会長を補佐し、役員や引き受け地の方々と協力し、より良いものになりたいと思っています。ご協力お願いいたします。



ヨシの利用と活用

島田川の豊かな流域づくり連絡会議

藪 博昭

私たちは島田川の上流域から下流域までの流域に関わる人たちが協働・連携して、森・川・海を育み、育まれながら『ふるさとの川でつながる循環共生社会を目指す』ことを目標に平成二十五年に設立しました。現在、会員数は十六の機関・団体・個人で構成しています。島田川の本流は岩国市由宇町源を発し、柳井市、岩国市玖珂町・周東町・周南市熊毛町を経て光市を流下し、瀬戸内海周防灘に注ぐ全長三十四・五キロメートルで、大小二十三の支流があり、流域面積は二百六十九平方キロメートルの二級河川です。

島田川には上流から下流・河口に至るまでヨシやオギが生育しています。ヨシやオギは里山の風景には欠かせない植物で、ヨシキリ・カワガラス・カモ・サギなどの野鳥の住



処・休息地・食餌場所となっています。また、根の部分にはバクテリアが棲んでいて水の浄化に役立っています。しかし、ひとの生活様式が変化し、ヨシやオギが放置されているため、繁茂しすぎた地域があり、大雨の時には、河川の流下能力が低下し、洪水を引き起こす要因となっています。更に、ヨシ原には流下物が滞留して衛生上問題となっている地域もあります。枯れたヨシは河川の増水で茎が折れて河口にまで流れて、風光明媚な虹ヶ浜海岸を埋め尽くすこともあります。このようにヨシは人との共生において一長一短があり適度な生育環境を保つことが大切です。

私たちは、ヨシ原を適度な保全環境とするために調査や利用・活用について協議をしてきました。今年度はその一部を連絡会議主催のイベントに取り入れて参加した人たちに紹介をし、理解を求めました。

まず、ヨシ原の保全について

①過剰に繁茂し、防災上問題となる地域のヨシ原は年度ごとに順次所管の土木建築事務所で刈り取りと河床の浚渫工事をいたしました。浚渫をした一部の箇所はヨシを残し、再生機能を持たせています。

②ヨシ原の野焼きですが、きらら浜の自然観察公園では冬の風物詩となっていますが、島田川流域では大規模な野焼きは出来

ません。代わってヨシ原の一面を刈り取り、冬の風物詩となるどんと焼きを紹介しています。上流域では刈り取ったヨシをそのまま放置することが多く、関係機関や漁協、自治体との協議は必要ですが、どんと焼きはヨシの処置に有効と思っています。どんと焼きのイベントによって地域のふれあいやまちづくりに貢献できれば幸いです。京橋かいわいあしがる倶楽部の例を紹介します。



次にヨシ原の自然環境の学習について

①ヨシ原の環境《ヨシの地下茎の延伸の様子、ヨシ原に棲むヨシハラカニ・チゴカニ・巻貝などのいきもの観察、滞留するごみの問題》などについて現地で体験学習をしました。

②ヨシを利用・活用した学習を下流域や上流域のイベントに取り入れて参加者と楽しみました。

○ヨシの茎や穂で絵筆をつくりお絵かきです。愉快的作品が出来上がりました。

ヨシの穂をリスのしっぽにした素晴らしいアイデアも生まれました。



来年はヨシのクラフトアートのメニューを増やしたいと思っています。

○ヨシの茎でヨシ笛づくりに挑戦です。会員でもある周東里山の会の藤井会長にご



指導をいただきました。上手くできるか緊張した気持ちで参加したことも大人もブーとか、ブワーとか音が

でると笑顔に変わりました。

夫をすれば演奏が出来ると期待をしています。



○ヨシ原で楽しい宝探しや迷路遊びなどのヨシ原探検です。子供たちは宝物を目指してヨシ原の中に一目散に駆け込んで、ヨシの茎に吊るした宝物を見つけていました。



○ヨシの茎を束ねてカヌー状のヨシ舟づくりに挑戦中です。三分の一くらいの模型をつくり展示したところ関心が高く、ヨシ舟作りに参加したいとの希望を多くいただきました。今年は、ヨシをもっと刈り取りヨシ舟をつくり島田川に浮かべたいと思っています。

このように、ヨシに触れてみて、地域とのつながりや川への親しむ機会やひが増えること願っています。

最後に、歌手三山ひろしが歌っている「四十川」を島田川に置き換えて、山（森）・川・里（ふるさと）・海の出会いとつながりを深めていきたいと思っています。



総会&リレーミーティング

in 長門

平成二十八年六月十八日(土)に長門市の
パタ屋で総会を行った後、引き続き、翌十九
日午前までの日程で第十三回リレーミーティ
ングが開催されました。

はじめに、総会(参加者三十名)において、
会長表彰を行い、東岐波里海再生の会を代表
して壽恵村会長に、白井会長より表彰状が授
与されました。



総会の記念写真

H28.6.18 パタ屋(長門市)

次に、母なる海を守る会の会長島壽一明氏
及び事務局森田和康氏を講師にお迎えし、
「ビーチクリーン大作戦」と題し、ご講演い
ただきました。

リレーミーティングでは、長門市油谷で塩
づくりをされている百姓庵の井上義氏より、
塩の製造工程、天然塩と人とのつながり等の
説明を受け、施設の見学や出来たての塩の試
食をさせていただきました。



塩の工場見学 ~百姓庵にて~

夕刻からパタ屋で夕食(海鮮バーベキュー)
・懇談会を行い、カード(カタルタ)を使っ
ての自己紹介、手品や腹話術の披露等で会場
は盛り上がり、日頃交流が少ない会員との交
流を楽しみました。



ながと大内湯けむり街道 街道整備
~長門・依山道路の工事現場にて~

翌日は雨が心配されましたが、どうにか予
定どおり行うことができました。

ながと大内湯けむり街道にて解説を聞きな
がらの街道整備、その後、依山の温泉街を宮
野修治氏(依山しつちよる会会長)のガイド
で源泉等を視察しました。温泉閣でゆつくり
二日間を振り返りながら昼食をとり、無事全
ての日程を終えることができました。

*今回の開催にご尽力いただきました皆様に厚
くお礼申し上げます。

今回のリレーミーティングでも、他団体の活
動を見て、知って、それぞれの活動に活かし
ただければと思っています。次回も多くの皆
様のご参加をお待ちしています!!

祝 会長表彰

平成二十八年度総会(六月十八日(土))
において、東岐波里海再生の会(宇部市)
のやまぐち自然共生ネットワーク会長表彰
を行い、翌十九日(日)午後から副賞の記
念樹「オリーブ」の苗の植樹を行いました。
東岐波里海再生の会の功績
海岸の清掃活動、海岸植樹、アサリの放
流や保護活動等長年にわたり自然環境保全
活動に努められた功績は顕著である。

表彰式 H28.6.18 (土)

パタ屋 in 長門



白井啓二会長 壽恵村泰生会長
(東岐波里海再生の会)

記念植樹 H28.6.19 (日)

宇部市東岐波にて



東岐波里海再生の会の皆様

白井会長(左前)

贈 記念樹(オリーブ)

東岐波里海再生の会 様

貴団体は、長年にわたる地道な努力と情熱で海岸の清掃活動や海岸植樹を行う
とともに干潟の再生を目指したアサリの放流や保護活動に取り組み自然環境保
全活動に精励されました。

よって、ここに記念樹を贈り感謝の意を表するとともにその功績を讃えます。

平成28年6月吉日

やまぐち自然共生ネットワーク会長 白井 啓二

表彰プレート

編集後記

昨年から花を育て始めました。家の中に居ても自然、季節の移ろいを少し感じることが出来ます。ただ、植物を育てるのは簡単ではありません。日照不足なのか、水をやりすぎなのか。枯れかかった時期もありましたが、どうにかまた元氣を取り戻しました。今年も花をつけてほしいものです。



やまぐち自然共生ネットワークに関わり、早くも九ヶ月が過ぎました。たくさんのお会いの中で様々な話が何えることはとても貴重な経験だと感じます。この活動を通じて、皆様の活動を紹介し、ネットワークを拡げるお手伝いが少しでもできればと思います。

このたび執筆いただきました皆様には心よりお礼を申し上げます。ご意見・ご投稿をお待ちしています。

編集担当 藤本

*会員大募集!

十二月一日現在の会員数は次のとおりとなっています。

*団体会員 四十二団体

*個人会員 九十八名

お知らせの方々に声をかけてネットワークの輪を拡げませんか。

〈表紙の写真説明〉

上段：秋吉台の円頂残丘（お鉢山）にかかった高積雲

中段左：湧泉から始まる黒岩川の川底で見られるおうけつぐん甌穴群

中段右：秋吉石灰岩に貫入してきた火成岩（貫入岩）

下段：山焼きの炎が鳥のように空中を飛ぶ。「火の鳥」と呼ばれる。